

平成30年度 学内研究助成金 研究報告書

研 究 種 目	<input type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input checked="" type="checkbox"/> 21世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 21世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金)
研 究 課 題 名	文理協働による環境まちづくりプロジェクト	
研究者所属・氏名	研究代表者：理工学部 社会環境工学科 教授 竹原 幸生 共同研究者：総合社会学部 環境・まちづくり専攻 教授 久 隆浩	

1. 研究目的・内容

これからの“環境まちづくり”には、住民が、主体的に判断する基礎となる幅広い様々な分野の環境データや、対話や合意形成を行うネットワークを容易に入手できる環境の構築が急務である。本研究では、河内地域を中心に、文理を問わず多様な分野が協働で環境情報の収集と再構築、そして地域に「見える」形で情報発信する技術やデザインの構築を目的とする。また、大学と地域が協働して進める“環境まちづくり”のモデルケースとなる“近畿大学発の環境まちづくり”手法の確立を目指す。

2. 研究経過及び成果

本研究では、以下の3ステップにより、最終目標である“環境まちづくり”プラットフォームの構築を目指す。そのためには、文理の枠を超えた、学部横断型の活動から、地域課題解決に寄与できる“環境まちづくり”手法の構築と、それを実際の地域課題に適用して得られる「実学」（その効果、結果）を系統的にまとめることが必要となる。

【1】“環境まちづくり”に関する専門的な課題抽出と地域が抱える課題の抽出

- 1) 近畿大学の研究者による“環境まちづくり”に関する専門的な課題の抽出
- 2) 地域住民（近畿大学外のステークホルダー）が抱える課題の抽出

【2】“環境まちづくり”に向けた、研究者と地域住民の相互協力関係の構築

【3】新しい“環境まちづくり”に向けた、研究者と地域住民の協働

本プロジェクトは、平成27年11月から10学部、当初39名の研究者の協働により活動を始めた。まず、“環境まちづくり”に関わる全ての利害関係者（ステークホルダー）間にて情報共有ができる体制づくりを進めることとした。そのために、“環境まちづくり”を軸に各研究者の相互理解を図り、研究者間で知識や技術を交流できる関係を構築する必要があった。そこで、構築されたコアを中心に検討した内容を、学内関係部局（学術研究支援部・広報部・入学センターなど）と連携して、大学全体で共有できる体制を構築し、インターネット環境を通じてプラットフォームを広く開示することを目的に活動を行った。平成29年度は、全体ミーティングの実施に加えて、アクトを活動拠点として、地域住民（近畿大学外のステークホルダー）が抱える課題の抽出を実施していくことを主題に、学外からの話題提供者による地域活動報告とともに、情報交換会を活発に実施した。並行して、未来を支える学生が、所属する学部・学科の枠を超え、他分野や“生きた環境まちづくり”への取り組みに触れながら、考え、交流することを目的に、大学院生を中心とした学生版環境まちづくりプロジェクトの立ち上げや、まちづくりのために自主的に活動している学生団体との交流も始めた。

平成30年度は、10学部45名の研究者と複数の学生団体が参加し、アカデミックシアターという大きな資源を生かし、地域の方々や学生団体らとの交流を活発化するとともに、環境まちづくり手法の課題をとりまとめることを目的として実施した。実施回数として、内容は大小あるが、全体ミーティングを3回、個別ミーティング40回以上、学生ミーティングも40回以上実施した。代表的なものを以下に挙げる。

全体ミーティングでは、学生との交流を活発化するための学生交流会を実施した。環境まちづくりプロジェクトで立ち上げた「学生版まちプロ」、これまでプロジェクトでも講演してきた「はちのじ」や「ハッピーアースデイ大阪」に加えて、理工学部から「ロシア短期留学生」、そしてアカデミックオーディションでも活躍した「学生農業団体 GAVRI」にも参加してもらった。自己紹介を兼ねたプレゼ

ンテーションの後、学生同士の交流を深めてもらった。

個別ミーティングの一つの座談会では、在外研究で1年間スウェーデンに滞在してきた理工学部の高岡准教授から滞在中の研究や生活について講演をしていただいた。学生の参加も多く、関係した学部以外にも国際学部からの参加者もあり、大変有意義な交流会となった。また、建築学部の高岡准教授から所有者の協力で生きた建築物の内部を見学する「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」（イケフェス大阪）の紹介をしていただき、その歴史や文化、市民の暮らしぶりなどを感じる意義を説明いただいた。普段参加の少ない建築学部の参加者もあり、大いに盛り上がった。また、「大阪湾をはかるプロジェクト」が始まった。大阪湾を対象に文系理系を問わずに話題提供を行い、情報共有することで俯瞰的に大阪湾を見つめ直すプロジェクトである。初回は、早稲田大学の廣瀬助教と大阪市立大学の遠藤講師に大阪湾の地底からわかる大阪周辺環境や、大阪湾周辺の二酸化炭素の循環に関する話題提供を頂いた。大阪の北浜から船に乗って、また徒歩でまちを眺めながら文理融合のまちあるきを実施した。

学生ミーティングは、自主的な活動を実施している「はちのじ」や「ハッピーアースデイ大阪」を中心に、自主的な活動を行っていた。

本年度は、アカデミックシアターという大きな資源を生かし、地域の方々や学生団体らとの交流を活発化するとともに、環境まちづくり手法の課題をとりまとめることを目的とした。個々のまちづくりには、環境を俯瞰的かつ継続的に見るための情報があふれるコミュニティが必要である。そのコミュニティは、自主的な参加をいつでも受け入れ、参加者の多様な考えが交差する場であることが重要である。本プロジェクトでは、環境まちづくりに欠かせない俯瞰的な視点を与えるコミュニティを全体から個別まで多層的に構築することを実践することができた。この研究機関で十分に住民や公共団体等と交流を深めることはできていないが、この活動をゆるやかに継続し、地域、公共団体や学生との交流を実践することで、環境まちづくりの実学に繋げていきたいと考えている。

3. 本研究と関連した今後の研究計画

実践コミュニティの原則に照らし合わせると、これまでの環境まちづくりプロジェクトがまさしく実践コミュニティを志向して運営されている。これからもこれらの原則を念頭に置きながら、無理なく長く継続できる「知の集合体」として発展させていきたいと考えている。そして、環境まちづくりに関連する研究を取り扱っている近畿大学教員相互、さらには教員と地域住民、行政、企業、NPO等との連携を構築するプラットフォーム形成と継続をめざす。

4. 成果の発表等

発表機関名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日(予定を含む)